

言語小論 ④

大 森 孝

◎ 言語と原色について

複合色（融合色）は別として、単一色は、人が容易に識別出来る様な、一定の外形的特性を、持って居ると考えられる。しかし、その色の象徴するものは、各国の文化の違いによって異なって来るが、人は原色については、その識別方法は、世界何れの国でも、皆同じであると考えやすい。こうした事柄について、ハーバート、パッシン（Herbert Passin）（コロンビア大学教授、及び同大学アジア研究所々員）の説を参考にしながら、考えてみたい。

○ blue（青）について考えてみると、我々の身近に見るものとして交通信号がある。Go-Sign の場合、我々は青信号と呼び、所謂 blue であると云っているが、世界の大部分の国では、緑（Green）であると云っている。この違いは、どこから来るのであろうか。自分も先年、外国旅行した際 Go-Sign を、近くに居た外人が、独り言の様にグリーンと言うのを聞いて、奇異な感じがした経験がある。こうした色調の呼名の混乱は、融合色の様な場合は、別に不思議ではない。例えば、brown を、茶色と呼ぶか褐色と呼ぶか、狐色と呼ぶか決定するのは難かしい。しかし、青と緑の融合は、日本に於ては長い歴史をもっている様である。この事に関して、パッシンは、万葉集の中の例を上げながら、次の様に述べている。

"Aoyama no yokogiru Kumo no ichi shiroku, Ware to emashite hito ni shirayuna." Clearly, the Ao means "green," and in English this would have to be translated as "hills of green," not as "hills of blue."

即ち「“青山の横切る雲の位置白く、我とえまして、人に知らゆな” はつきりと、青は緑を意味し、英語では青の岡ではなくて、緑の岡として、訳されねばならぬであろう。」

以上の様に、彼は述べて居るが、更に、例外的用法として、アメリカ、ケンタッキー州について、次の様に述べている。

I say normally because there is one interesting exception I know of: "the blue grass country" of the State of Kentucky. But this is an exceptional usage, which refers to the especial richness of the soil in the particular area of Kentucky that is most famous for its bourbon whiskey, thoroughbred horses, and beautiful southern women.

即ち、「私は、自分の知っている一つの面白い例外、即ち、ケンタッキー州の“青草の土地”、と云う言葉を述べるが、しかし、これは例外的用法で、この用法は、其の土地のバーボン、ウイスキーや、サラブレットの馬や、美しい南部の婦人達で非常に有名である特別の地域であるケンタッキーの豊かさに、関係している。」即ち、彼はこの場合ケンタッキーの豊かさを、表わす言葉として、blue を用いていると云うのである。

しかし、日本語の青は、特別の例外を除いて、大部分英語では、green として示される。少し例を示すならば、青竹 (green bamboo)、青物屋 (green grocer)、青葉 (greenery)、青えん豆 (green peas)、青田 (green rice fields) 等、又、句としては“顔が青ざめる” (a face turning green) 又は (going green with fear) 等である。

又、色は、前述した通り、外形上直接認められたものを、述べるのに用いられるだけでなく、象徴的に用いられる故、例えば、青二才、青童（あをあらわ）、青侍等は、未熟者、新人等の意味を表わし、この青は、英語では何れも green で示した。又、アメリカの大学の新生を、green cap と云う語で示す

が、これは何れも、経験不足、新人の意味である。

又、他に green には、“生き生きしている”、“元気がある”、と云う意味に用いられる。例示すると、以前政治団体に、緑風会と云うのがあり、又会社名にも、大和グリーン産業等がある。保険にも、グリーン保険と云うのもある。列車のファースト、クラスを、グリーン・カーとも呼ぶ。又別に、“緑の黒髪”と云う様な言葉もある。これ等のグリーンは、何れも、“新鮮な”、“生き生きしている”と云った意味をあらわしていると考ええる。

○ 黄色について

日本に於ては、一般に黄色は、独立した色とは認められず、赤色の中に含まれていた様である。純粋な黄色は用いられず、金色か、黄色みかかった金色が多く用いられていた。これ等の色は、荘厳さと、威厳を示す為に、高位の人々や、宗教的目的の為に広く用いられた。尚、日本では、黄色が、独立した色として用いられたのは、平安時代であった。宇治の平等院の鳳凰堂や、平泉の中尊寺金色堂に、鮮明な黄色が見られる。

次に、黄色の象徴するものについて考えてみたい。先づ日本では、しばしば力、明るさ、希望、成長等を意味する。例示すると、黄口（小児、経験に乏しき人）、黄髪（老人）、黄道（太陽運行の軌道）等がある。

英語に於ては、黄色は如何なる意味を示すかについて、パッシンは、次の様に述べている。

In English yellow is generally perceived as a bad color. Yellow was the color of Juda's robes at the Last Supper, when he was preparing to betray Jesus. It has also come to mean "cowardly," as when we say that some one is "yellow," or that he is a "yellow belly."

即ち「英語に於ては、黄色は、一般に悪い色として考えられている。黄色はキリストを裏切ろうとして、最後の晩餐に“ユダ”が着ていた衣服の色であった。又其れは、人が誰かを“黄色い”、又は“黄色い腹”と呼ぶ時の様に、

“臆病”，“ひきょう”と云う意味になる。」

彼は、以上の様に述べているが、その象徴的意味も、日本に於ける意味とは大分違っている。

○ 次に赤色について考えてみたい。

赤色は、外形的使用方法に於ても、その象徴的意味に於ても、世界中殆んど同様である。先づ、交通信号に於ても、ストップサインは赤であり、赤の点滅は危険を示し、車の場合は一時停止となる。象徴的意味に於ては、熱情、興奮、喜び、革命、血色を示す。又、少こし変った意味で、安全な、直接的、かくすところなく、と云った意味を示す。単語を述べてみると、赤心、赤裸々、赤恥、赤身、赤誠、赤貪等がある。

結局色は、前に述べた様に、外界の物について述べるのに用いられるだけでなく、人の内部の精神状態の表現にも、用いられるため、色調は、人の感情や経験と、密接に関係していると云える。

尚、人がペンティングや、ドレスデザイン等に、特別に興味を示す場合、原色等の単一な色だけでなく、出来るだけ多くの種類の色を必要とする様になる。つまり、文化が進むにつれて、色のニードも、益々多くなって来る。

文化の低い程、色の範囲は少なくなっている。その例として、ピーター、ウールフソン (Peter Woolfson) は次の様に述べている。

⁽¹⁾
The Shona of Rhodesia have only three major color terms: cipuka (orange, red, purple and some blue), citena (blue and some green), and cicena (green and yellow).

⁽²⁾
The Bassa of Liberia have only two major color terms: hui which represents purple, blue, and green; and ziza which represents yellow, orange, and red. In one sense, these more restricted vocabularies do not affect consciousness.

即ち、「ローデシアのショナ語は3つの主な色についての語を、持ってい

るだけである。即ち、"シップス・ウカ"（オレンジ、赤、紫、いくつかのブルーを含む）と"シテマ"（ブルーといくつかのグリーンを含む）と"シセナ"（グリーンとイエローを含む）である。

リベリアのバッサ語は、2つの色についての語を持つだけである。即ち"ファイ"（紫と青と緑を表わす）と"ジザ"（黄色とオレンジ色と赤色を表わす）である。或る意味では、これ等の一層制限された語は、人の意識には影響しない。」

彼は、以上の様に述べているが、更に附言して、彼等が更に細かい色を区別したい時には、前の色に、周囲の物をつけ足して、用いていたと、述べている。例として、leaf citena, sky cicena, の様にある。

他方多くの心理学者達は、色の区別をする多くの語がある事は、子供の頃、見た物の色を賞えるのに、非常に役に立つ、と云っている。この事に関し、ウルフソンは次の様に述べている。

The more color terms the subject in these experiments had, the better their memories were for sorting out the colors they had seen. These examples show that there is a relationship between vocabulary, cultural emphasis, and habitual consciousness.

即ち、「実験の中で、物がより多くの色についての語を、持てば持つ程、人が見た事のある色を、選び出すための記憶は、一層よくなった。此等の例は、語と、文化的高さと、習慣的意識の間には、一つの関係がある事を示す。」彼は、この様に述べているが、確かに彼の意見には賛同出来る。

次に、有名な日本通のアメリカの批評家であるE. サイデンステッカー (E. Seidensticker) は、源氏物語の色調について、次の様に述べている。

Colors presented another very great difficulty and here again I do not doubt that she finds the English translation coarse and vulgar.

We can imagine from modern exercises in the use of traditional

dyestuffs, how lovely the color combination of the Genji were, and we can see very clearly how important they were to Genji and his world; but to translate them is another matter. Except for the primary colors, equivalents are not readily at hand. Scientific description, in terms of light waves and blends of primary colors, is always possible, but it quickly becomes tiresome, and the effect is spoiled completely.

即ち、「色調は、他の非常に大きな困難を提示した。ここに再び自分は、彼女（紫式部）が、英語の翻訳は粗雑で、野卑であると認める事は、疑いがないと思う。我々は、伝統的染料を用いての現代的実験から、源氏物語の色の結合が如何に美しかったかを想像出来る。そして又、その色の結合が、源氏や、彼の世界に対し、如何に重要であったかを、非常に、はっきりと知る事が出来る。しかし、それ等を翻訳する事は、別の事柄である。原色以外は、其等に相当する色調は、手近にない。明るい色調や、原色を混合した言葉を用いて、科学的に述べる事は、常に容易である。しかし、そうした事は、すぐに飽きる様になるし、その効果は、完全に駄目になってしまう。」

以上の文から、スティッカーが源氏物語の中の色調に対し、如何に感嘆していたかを、知る事が出来る。

◎言語と変化について

棲神「51号」に於て、言語の変化について、一般的に少し述べた次第ですが今回は、もう少し具体的に、論を進めてみたいと思う。

よく日本語は、他の言語に比較して、或る点で特異的であり、翻訳しにくいと云われる。確かにそう云えるかも知れないが、こうした事は、日本語だけに限った事とは言えないと思う。日本語特有の言葉として、“わび” “さび” “あわれ” と云った語がある。これ等の言葉が、如何なる性質、意味を持っている

かについて、外国人の立場から、パッシンは次の様に述べている。

Wabi refers to the taste for the simple and quiet; Sabi to elegant simplicity, the beautiful patina of age; and Aware to the pathos, the pain of sensibility of beauty.

即ち「わび」は簡素と静けさに対する「味わい」に関係し、「さび」は上品な簡素さ、年代を経た美しい「つや」に関係し、そして、「あわれ」は、悲哀、美に対する感性の「苦しみ」に関係している。」

更に、パッシンは、こうした言語が日本に存在するが、他の国の言語に存在しない事について、次の様に述べている。

It surely cannot mean that the feelings associated with these terms do not exist elsewhere. Foreigners can comprehend them and find terms to express them if necessary, even if simple words are not adequate. Perhaps it is that they are more important in Japanese life than in the West, or that they play a larger role; and this I would be willing to concede. But whether they do so or not is an empirical question and is not predecided by whether the concept terms exist or not.

即ち、「此等の言葉に関係する感情が、他の国には存在しないと云う事は、考えられない。外国人も、其等の感情を理解でき、必要あらば、其等の感情をあらわす言葉を、一言では難かしいにしても、見つける事が出来る。しかし、そうした言葉は、日本の生活に於ては、西洋に於けるより、はるかに重要であり、又、より大きい役割を演じていると云う事である。この事は、私も進んで認めるだろう。しかし、其等の言葉が、その様な役割を、演ずるか演じないかは、経験上の問題であり、そうした概念の言葉が、存在するか、しないかによって、前もって、定める事は出来ない。」

以上の様に、彼は述べているが、こうした言葉が、日本人の生活上の経験か

ら生れて来た事は、確かであるが、果して、外国人が、こうした感情を彼の言う様にどの程度迄、理解出来るか疑問に思う。

結局、こうした言葉も、人の生活の中から生れて来たわけであり、生活が變つて来るにつれて、言葉も變つて来ると思う。所謂、言語は、変化してゆくと考える。具体的例として、敬語の問題がある。日本は戦後身分関係が變わり、平等主義が広まり、家族単位にしても、核家族化で、横のつながりを示す語は多くなり、縦のつながりを示す語は、逆に減少し、従って、敬語も非常に變つて来ている。

又、新しい概念や、世の中を見たり、自分を表現する新しい方法を示すものとして、新語が出て来ている。新しい考えや感情は、古い言葉では、満足に表現出来ない故に、人は、新しい表現方法や、又は、古い言葉を、新しい方法で用いたり、時には、外国語を借用したりして、新語を作り上げるのである。具体的例として、パーソンは次の様に述べている。

The emergence into popular usage of such a foreign term as "community," in place of Rinpo, Kinjo, Machi, and so on, suggests that people are looking for some new form of neighborhood relations that cannot be expressed by any of the traditional words. Or such words as "group", "club", or "circle", to replace such traditional words as Kumi, Uchiwa, Kai, and so on, again suggests the possibility that people are trying to express some non-traditional feature or organized interpersonal relations.

即ち、「隣保近所、町等の代りに、外国語のコミュニティの様な語の出現は、人々が、どんな伝統的な言葉によっても、表現出来ない近所関係の新しい形を、さがしている事を示している。又、組、内輪、会等の様な伝統的語の代りに用いられるグループ、クラブ、サークル等の語は、人々が、或る伝統的でない特徴や、組織化された人間関係を、表現しようと努めている可能性を示し

ている。」

以上の様に彼は述べているが、コミュニティと云う語は、我が国では、種々の社会施設を示す語として広く用いられて居り、又隣保と云った語は、現在も地方では広く用いられている。

グループ、クラブ、サークルと云った語は、日本人の日常生活の中に入りきっている。ただ、こうした語は、多くはアメリカ、一部は英国等から来たものであり、伝統的な日本語に置きかえると、いくらか違ったニュアンスになると考えられる。一つの語を、全くそのままの意味感情をもつ他国の語に置きかえる事は、至難であると云える。ただ或る程度意味が一致する、相似した語に代える事は出来る。又、色々の外国語が、日本語の中に入り込んで居り、こうした現象を、日本語の退化であるとする人もあり、又、日本語の発展につながると見る人もいる。ただ、その取り入れられる方法が、手当たり次第であると、有効なコミュニケーションを欠く恐れがある。言葉が使用者のフィーリングだけで用いられると、完全なコミュニケーションに欠け、日本語そのものに、悪い変化を与える事になる。

次に、言語学者マリオ・ペイ（Mario, Pei. 1901～1978）の意見を参考にしつつ、外国語を中心に、意味の変化について考えてみたい。例えば、“silly”と云う語は、現在は foolish（愚かな馬鹿な）と云う意味に用いられているが、もとは、“blessed”（幸福な、恵を受けた）であった。これが“blessed fool”（馬鹿な程善良な者）の意味になり、終に“blessed”の意味が消えて、foolishの意味だけが残った。

又、一つの語が、違った言語に用いられると、意味が変わる事がある。英語の rent（家賃、地代）は、フランス語の renteから来ているが、rente は、「収入」を意味する、英語の income の意味である。何故英語に移ると意味が変わったかについて、ペイは次の様に述べている。

English got it at a time when particularly the only form of income

one could have was from rent on lands or buildings. English kept it that way.

即ち、「英国人は、当時収入の唯一の方法は、土地や建物からの家賃や、地代であった。英国人は rent を、家賃・地代の意味に考えて行った。」

又、同様に英語の "knight" について、彼は次の様に述べている。

English "Knight" and German "Knecht (knecht)" are similarly related. The German word means "serf", which at first glance seems far removed from "Knight." But a Knight had a subordinate position in the medieval world, being bound to serve either the king or a higher nobleman.

即ち、「英語の "Knight" とドイツ語の "Knecht (knecht)" は、同じ様に関係がある。ドイツ語では「農奴」を意味する。これは所謂, knight とは、一寸考えると、関係がない様に思われるが、しかし、Knight は中世に於ては、王が貴族に仕える事を強いられた、従属的地位であった。」

以上の様に彼は述べて、ドイツ語と英語で用いられる knight の意味の変化を、述べている。又、people と云う語について、その変化を考えてみると、もともとこの語は、the people in the room, the people of the united states of America. と云う様に、非常に一般的に広く用いられ、人々の心に暖たかい、楽しい友人の感情を与える語である。こうした事を知って、社会主義者等が、広くこの語を用いる様になったと云われる。例えば、people's republic (人民共和国)、people's court (人民の裁判)、people's army (人民軍)、people's square (人民広場) 等である。しかし、一般の人民が、こうした感情を、この語に対して持っているか、どうかは、疑問である。又、日本語で「人民」と訳した場合、一寸ニュアンスが違って来ると考える。

凡ての言語に於て、或る語は消え、又或る語は生れ、古い語は、新しい形にと組立てられ、こうして、その用途も意味も、変ってゆくと考える。

死語と云われるラテン語について考えてみると、この語は、ローマ帝国滅亡後も、ずうと長く話され続けて来ており、中世を通してヨーロッパの凡ての国の学者達によって、用いられた言語であった。尚尚この語は現在も、ローマン・カソリック教会の牧師達によって話されて居り、又科学用語としても用いられて居る。又、他の用法、例えば“extra”, “super”, “bonus”, “propaganda”, “video”等は、ラテン語そのものである。尚、多少の変化はあるが、直系の語として、ロマンス語フランス語スペイン語イタリア語、ポルトガル語、ルーマニア語がある。

同様に死語と云われるギリシャ語について考えてみると、この語は、変化しつつも、決して消滅はしていない。ローマ帝国時代に於ても、話されつづけて来たり、今日でも、ギリシャの話言葉になっている。又、科学や、技術の用語として、広く世界でも用いられている。例えば、我々の日常用いている、“phone”, “gym”, “electric”, “geography”, “arithmetic”, 等がある。

次に、同じ語でも、そのシチュエーションによって色々の意味に用いられる事が多い。例えば、英語について考えてみると、run の意味を考えると、元の意味は“走る”と云う意味であるが、転じて、“流れる”“動く”“通じる”“追う”“刺す”“ぶっつける”“経営する”“冒す”，と云った意味になる。又、宝石のダイヤモンドは、そのカットされた石に形が似ているところから、野球のダイヤモンドとして用いられている。次に“ring”と云う語は、最初はスポーツ、ゲームをする円形の場所の意味に用いられていたが、現在、ボクシングのリングの様に、四角の場所であっても、用いられている。フランス語から、英語に移って来た“foyer”と云う語は、現在、ホテルや劇場のロビーの意味に用いられているが、元は、fireplace（炉）の意味であった。この炉は、ホテルや劇場の様なロビーで用いられた。こうした事より、“foyer”は、ロビーの意味に現在用いられている。次に、語の意味を研究する事を Semantics（意味論）と云うが、こうした語の意味を研究するためには、dictionary や、

文献を research（調査，研究）する必要がある，この事から，Semantics は又，調査の意味にも用いられる。

尚，前に述べたサヂン，スティッカーは，日本語の複合語について，次の様に述べている。

When a complex word is used as frequently as Omou is in Kawabata's writings, it presents far greater difficulties than Wabi and Sabi, which tend to be limited and concrete, are ever likely to present.

即ち，「一つの複合語（融合語）が，“思う”と云う語が，川端の作品でしばしば使われると同様に，用いられる時，限定され，定形化される傾向のある“わび”，“さび”と云う語が，今迄に提示するより以上の，非常な難かしさを，提示する。」

以上の様に彼は，日本語の複合語の微妙な意味の違いと，その翻訳の難かしさについて，述べている。

結局，言語は，その当時の人々の生活様式，行動を，反映するものであるが，如何なる言語も，少こしづつ変化して行く傾向が見られる。そして，何か新しいものになってゆくものである。我々が現在使用している言語も，決して，最終のものであると，考える事は出来ない。（1980，8）

Notes:

- (1) Shona [sóuna] サハラ以南では，最も広範囲に広がるニジェール・ゴールドファン語族の中，ニジェール・コンゴ語族のバンツー（Bantu）諸語に属す。
- (2) Bassa [baesa] アフリカ赤道森林地帯のほぼ全域と，南部の多くの地方で話されるニジェール・コンゴ語族中の，クワ諸語に属する。

Bibliography:

- E. Sapir: Language, 1930, America,
- M. Pei: All about Language, America,
- P. Woolfson: Language and Humanity, 1973, America,

言語小論④ (大森)

H. Passin: Language and Cultural Pattern, America

上に同じ	1979, Tokyo,
古語辞典	旺文社 東京
学習百科辞典	学研 東京
日本古典文学大系	岩波書店 東京
新選漢和辞典	小学館 東京